特選ブログ
shin1さんの日記
Vol.44

人間牧場主・年輪塾々長
若松　進一

温泉から広がる地域の活性化

私が「温泉」という言葉を耳にしたのは、小学校六年生の時の修学旅行でした。八幡浜から船に乗って豊後水道を渡り、別府で泊まる一泊二日の旅は、戦後間もないこともあって、家族旅行など殆どしたことのない私たちにとっては非日常的で、まるで夢の世界にでも迷い込んだような大きな驚きの連続でした。市内の至る所から白い蒸気が噴き出る別府湯の街を、ケーブルカーで登った楽天地から眺めたり、亀の井バスに乗って若い女性のバスガイドさんの流ちょうな案内で巡った地獄巡りなどの、少年の頃の印象的な思い出は、年老いた今でも心の中に深く焼き付いていますが、別府を日本屈指の温泉地にしたのは、「別府観光の父・別府の恩人」と讃えられる、愛媛県宇和島市出身の油屋熊八なのです。

油屋熊八は「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」というキャッチフレーズをつくり、その看板を富士山頂付近に建てたり、温泉マークを別府温泉のシンボルマークとして愛用するなど、様々なアイディアを使って別府の宣伝に情熱を傾けましたが、日本初の女性バスガイドによる案内付きの定期観光バスを運行させたのも熊八でした。「旅人を懇ろにせよ」（旅人をもてなすことを忘れてはいけない）というのも熊八の口癖でした。

別府が一大温泉地として名を成していた頃、別府の奥座敷と言われながら、それほど知名度のなかった湯布院を、今日の日本を代表する温泉地にしたのは亀の井別荘の中谷健太郎さんや玉の湯の溝口薫平さんたちでした。彼らは綿密な作戦を練り、戦略と戦術を駆使して「牛喰い絶叫大会」や「湯布院映画祭」など、マスコミが飛びつきそうな奇抜なアイディアを次々と大ヒットさせ、日本中を驚かせました。それまでの日本は、温泉と言えばうらぶれた湯治宿的存在でしたが、湯布院では人が集まる「楽しい・新しい・美しい」の三つのキーワードでまちづくりを行い、温泉のイメージを根本から変えて行きました。多分「温泉から広がる地域の活性化」を日本で最初にやって成功したのは、湯布院ではないかと思うのです。私たちもまちづくりの駆け出しのころ足繁く湯布院に通い、中谷さんや溝口さんたちの指導を受けましたが、そのしたたかな油屋熊八に相通じる部分に加え、団体旅行から家族や仲間旅行への旅のスタイルが変化することを彼らは、いち早く感じ取っていたように思うのです。

最近わが愛媛県松山の道後温泉が何かと話題豊富で、特に若い女性には人気があり、「行きたい温泉地」で度々一～二位に選ばれています。これまでの温泉地は湯上りに浴衣を着て土産物売り場をぶらつき、時には射的やスマートボールに立寄るようなイメージがありましたが、道後温泉では温泉を芸術とコラボさせるなど新しい感覚の温泉地に変身しようとしています。それは別府にもない、湯布院にもない新しい時代の温泉スタイルの幕開けかも知れません。

かつて島根出身の竹下登総理大臣が「ふるさと創生一億円」という、奇抜な事業を行いました。この事業は市町村規模の大小にかかわらず、それぞれの自

治体へ一律一億円を配布し、しかも使い方は自由というものでした。一部にはバラマキ行政とか人気取りだと揶揄する人もいましたが、それぞれの市町村では会議を起こし、住民にアイディアを求め、一億円フィーバーが社会現象となって、大いに盛り上がりました。中には金塊や宝くじを買ったり、温泉掘削の一部に充てた市町村もありました。結果的には温泉の湯脈を見つけることができず、首長の責任問題に発展したものまでありました。

そのころから交流人口の拡大の一手段として温泉の掘削や温浴施設整備に行政が取り組み始めたものの、その運営は決して甘いものではなく苦戦を強いられ、県内のあちらこちらには公設民営の温泉が名残として残っていますが、月一万人、年間12万人と言われる損益分岐点を越えられないばかりか、施設の老朽化も手伝って、平成の市町村合併で熱が冷めたようにも見えるのです。

温泉は交流人口の拡大とともに、何かと疎遠になりがちな現代社会の人間関係を、お湯が取り持ち修復してくれる一面を持っていて、魅力のあるものに違いはありません。しかし温泉が欲しくても、地質的に湯脈や水脈がどの市町村にもあるものではないし、また掘削ボーリングには莫大な資金が必要なことは誰もが知っています。ましてや水商売・客商売ですから湯質や規模、立地条件によって経営が大きく左右されるのです。

はてさて、温泉好きな地域づくり人にとって温泉は行き着く所、「欲しいけれども高嶺の花」って感じです。そこで考えた妙案は、温泉スタンドで買って帰ったお湯を温め直して使ったり、市販の全国ブランド温泉の入浴剤を使って楽しむ面白半分の方法です。手間もお金もそれほどかからないので、現に民宿の幾つかは、名の知れた温泉のお湯を積んだタンクローリーでお湯の配達をしてもらい、温泉の看板を掛けて営業している所だってあるのですから、まんざらでもないのです。

私は人間牧場にロケーション風呂という小さな五右衛門風呂を造っています。薪と灯油ボイラー併用のエネルギーで沸かしていますが、これが瀬戸内海を見下ろす標高百三十mの高台にあって眺望が良いため中々の人気で、お風呂に入るだけでなく坪くり風呂釜の周りに車座になって座り、足湯をしながらお喋りを楽しんでいます。

今日本の田舎は作り手のいなくなった田畑が増え、森林の世話が追い付かず、雑草・雑木が生い茂り、環境保全の面からも大きな社会問題となっています。バイオマスほどではないにしても、雑木や間伐材をエネルギーとして利用する、温泉もどきな施設を造れば、人と人、都会と田舎の交流の拠点になるのかも知れないと、楽しくも淡い夢を見ながら「温泉から広がる地域の活性化」を夢見ています。

「山は富士　海は瀬戸内　湯は別府
油屋熊八　偉大な県人」
「新しい　楽しい加え　美しい
湯布院温泉　女性に人気」
「温泉は　費用莫大　かかる故
高嶺の花と　諦め先行」
「自分流　模擬温泉を　楽しもう
足湯ほっこり　心と体」

（若松進一の笑売啖呵）